

だいきく通信 第六十四号 「春の号」

いあさつ

今年の桜は咲き始めはややゆつくりでしたが、開き始めるとあつという間に満開となりました。比較的天候にも恵まれ、花を楽しむことができたと思います。

しかし、外に目を向けますと、ウクライナやガザでの戦争が収束しない中、イランでも戦争が始まってしまいました。一日も早く平和が戻ることを祈らずにはいられません。一日社報「だいきく通信」第六十四号をお届けします。

今回の内容は、新年のご祈祷受付時間、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。

大國神社の今

○だいきくクラシックスを開催

来たる五月九日、当神社拝殿にて第8回だいきくクラシックスを開催します。昨年に引き続き、東京都交響楽団ヴァイオリン奏者田口美里さん、同じく東京都交響楽団ヴァイオリン奏者小林明子さんのお二人によるデュオ・コンサートです。曲目はマルティヌーの「3つのマドリガル」ほかを予定しております。



お宮あれこれ「曜日」の話

私たちが普段生活の中で使っている「曜日」は「月曜日」「金曜日」「日曜日」というふうに「月」「金」などの文字が登場します。なぜこのような呼び方をするのでしょう。今回は曜日の言い方についてお話ししましょう。

そもそも暦の上で七日を一つの単位とする数え方は、古代バビロニアで生まれたそうです。古代バビロニアでは、月の満ち欠けによる太陰暦が使われていました。ここでは七日、十四日、二十一日、二十八日が休日とされてきました。ここで七日おきになっているのは、月の満ち欠けが大きく変わる周期がもとなっていていそうです。

月は「新月↓上弦↓満月↓下弦↓新月」というふうに満ち欠けをします。ここで、新月から上弦までが約七日、上弦から満月までも約七日、というふうに約七日が周期になっています。

このように七日を単位とすることとなり、それぞれの日に名前がつけられました。日本語、古代ローマ時代のラテン語、英語それぞれの呼び方は次頁の表の通りです。



これを見ると、土曜、日曜はラテン語と英語がよく似た形ですが、ほかの曜日は異なっていることがわかります。たとえば、金曜はラテン語では Venus (ヴィーナス) に由来する Veneris でしたが、英語ではゲルマンの女神である Freya に置き換えて、Friday となっています。ラテン語の曜日の名前は星の名前からとっています。そして星の名前もともとローマ神話に登場する神様の名前でした。曜日の名前がラテン語からゲルマン語に入るときに、ゲルマンの人々は自分たちの神の名前に置き換えました。そのため、ラテン語と英語で違う呼び方をするようになりしました。

日本語		ラテン語		英語		
曜日名	天体名	曜日名	天体名	曜日名	天体名	神
土曜	土星	dies Saturni	Saturnus	Saturday	Saturn	Saturn
日曜	太陽	dies Solis	Sol	Sunday	Sun	Sun
月曜	月	dies Lunae	Luna	Monday	Moon	Moon
火曜	火星	dies Martis	Mars	Tuesday	Mars	Tiu
水曜	水星	dies Mercurii	Mercurius	Wednesday	Mercury	Woden
木曜	木星	dies Jovis	Jove (Iupiter)	Thursday	Jupiter	Thor
金曜	金星	dies Veneris	Venus	Friday	Venus	Freya

一方、日本語では日(太陽)・月・火・水・木・金・土と、太陽と月、それに惑星の名前が使われています。この呼び方のルーツは中国にあります。古代中国ではそれぞれの惑星のことを次のように呼んでいました。

歳星(さいせい) 木星(きんぼく) 熒惑(けいこく) 火星(くわせい)
 鎮星(ちんせい) 土星(どせい) 太白(たいはく) 金星(きんせい)
 辰星(しんせい) 水星(すいせい)

同時に、この世のあらゆるものは木・火・土・金・水からできているという五行説の考え方と結びついて「木星・火星・土星・金星・水星」という呼び方も使われていました。

そして平安時代に唐に渡った弘法大師空海が曜日の概念を日本に伝え、同時にこの呼び方を紹介しました。

五行説では五つの要素を先ほど記した「木・火・土・金・水」という順番で記すのが一般的です。

これは、現在の曜日の順番とは違っています。では、現在の曜日はなぜこの順番で並べられるようになったのでしょうか。

いくつかの説があるようですが、有力なのは次のようなものです。

中世までのヨーロッパの宇宙観である天動説では、太陽と月、それに惑星を地球から遠い順に並べると

土星・木星・火星・太陽(日)・金星・水星・月

だと考えられていました。

一方、西洋占星術では一日の二十四時間をそれぞれある決まった星が支配すると考えていました。そして、一日の始まりは一時とされ、一時を支配する星がその日一日を支配すると考えていたようです。



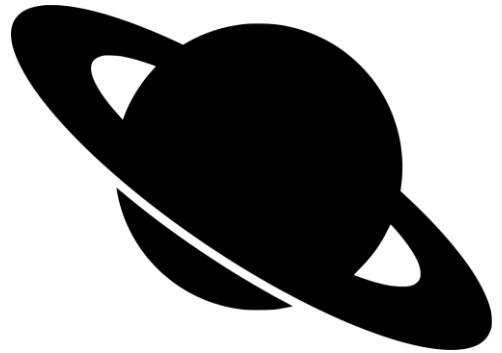
この考え方は、七つの星をこの順番で一日の二十四時間に当てはめていきます。始まりの一時が土星、二時が木星…となります。二十一時が月で、土星から月までを三周したことになります。そして、二十二時が最初に戻って土星、二十三時が木星、二十四時が火星です。そして、次の日の一時は太陽（日）です。これを繰り返していくと、一日の始まりである一時に当たる星は

土星・太陽（日）・月・火星・水星・木星・金星

となります。これは現在のカレンダーの順番とほぼ同じです。こんなふうに、天動説と占星術の考え方によって曜日の順番が決まったとする説です。

占星術や、占星術で用いる天宮図のことを英語では horoscope（ホロスコープ）と言います。このことばの horo は英語で「一時間」をあらわす hour（アワー）の語源でもあるギリシャ語の hora からきているそうです。このことも、ご紹介した説を裏付ける証拠と言えるでしょう。

ただ、この説では土曜から始まることになり、ちょっと変な感じがします。ところが、一世紀ごろのローマ皇帝ティトゥスの時代の浴場跡で見つかったカレンダーは一週間が土曜から始まるとされていたそうです。もともとは土曜始まりだったものが、長い歴史の中で日曜始まりに変わっていったのでしょう。



普段ごく当たり前のように使っている曜日ですが、そこにはとても古い歴史が隠れていることがわかります。

※今回のお話は、片山真人著『暦の科学』（ベレ出版）を参考にしました。

参考文献 『ジャパンナレッジ利用』『日本国語大辞典』『日本大百科全書』『世界大百科事典』

祭礼・祈祷などの案内

○次回甲子祭

令和八年六月十九日（金） 午前五時～正午

○開運千人講祈祷祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○諸祈祷受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈祷を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは電話もしくはメールにてお願いいたします。

不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しく下さい。のちほどこちらからご連絡いたします。

〈お問い合わせ・お申し込み〉

携帯 〇八〇―一九八七―八七二六

メール daikokujinja@gmail.com





(連載まんが)

大吉うさぎ ～神社などなど その3～

くま こまち 作



「だいいこく通信第六十四号」、いかがでしたか。次号「夏の号」は、令和八年八月十八日甲子祭に発行予定です。



「だいいこく通信」第六十四号 令和八年四月二十日発行
 編集・発行 大國神社社務所
 〒一七〇—〇〇〇三 東京都豊島区駒込三—二—十一
<http://www.daikokujinja.org>